

中高それぞれが目指す「自立」と「学習の連続性」を明確に意識する

中学校と高校の間にはどのような段差があるのか。二つの学校はどのように接続すればよいのか。進学校、進路多様校、公立中学校の教壇に立った経験を持つ3人の教師が、それぞれの視点で語り合う。

中学校と高校で異なる「自立」の意味

編集部 中高接続について感じられている課題を、中学校・高校それぞれの立場からお聞かせください。

杉山 高校生になって中学校と異なる集団に属し、仕切り直しが出来ることは、メリットになると感じています。以前の勤務校には国公立大志望者から就職志望者まで幅広い学力の生徒がいましたが、多くの生徒は「高校生になったのだから巻き返してやる」と決意を新たにしています。実際、高校生への切り替えがうまく出来た生徒は、どんどん伸びて

いきます。ただ、高校入学後に校内で成績下位層になった生徒の学習意欲をいかに引き出すかは、重要な課題です。たとえ進学校でも、授業が少し分からなくなっただけで高校の学習についていく気持ちを失ってしまふ生徒はいます。

三浦 公立中高一貫校に勤務した経験から、中学校の指導は母性的で、高校の指導は父性的だと感じます。中学校ではいろいろな教材を与えて教師が学習の仕方を細かく支援しますが、高校では生徒を自立した学習者にするのが目標です。しかし、全員がスムーズに高校の学習スタイルに移行できるわけではありません

ん。以前に比べ、高校入学段階から学習・生活習慣を手厚く見ていく必要を感じる生徒が多くなった気がします。

藤原 中学校でも「自立」は指導のキーワードです。ただし、それは学習面での自立ではなく、保護者からの自立を意味します。中学校における「自立」のイメージは、何でも保護者に頼っていた生徒が、保護者との衝突を経て、自分の進路について保護者と語り合えるまでになることです。そうなるまでには、教師への質問して聞くようになり、教師への質問も本質を突いたものになります。しかし、そうした生徒もいれば、小学



岡山県立烏城高校教頭

杉山義則 Sugiyama Yoshinori

教職歴27年。同校に赴任して1年目。担当教科は数学。岡山市立岡山商業高校、岡山県立邑久高校などを経て、現職。モットーは「教師は学びのコーディネーターであるべき」。

生と変わらないような生徒もいます。日々の指導ではどうしても上位層が放っておかれ、手の掛かる生徒が指導の中心になります。その意味



岡山県立岡山高校教頭

三浦隆志

Mura Takashi

教職歴29年。同校に赴任して1年目。担当教科は地歴・公民。岡山県立備前高校、岡山県立邑久高校、岡山県立岡山操山高校などを経て、2011年度より現職。モットーは「生徒と共に成長する」。

での生徒の自立の度合いの差は、近年どんどん広がり、教師はその対応に追われているように感じます。

杉山 生徒の二極化は高校でも実感しています。生徒の自立の度合いは、高校入学までに多様な経験を積んできたかどうかで大きく異なるように思います。ただ、中学時代は中間層に位置して目立たなかった生徒が、高校ではリーダーになって活躍することもあります。高校に入学して所属する集団が変わることによって、新たな可能性が生まれるのだと思います。

**考える楽しさを体験できる
多様な指導方法が必要に**

編集部 生徒の「自立」の二極化は、日々の授業にも影響を与えているのでしょうか。

藤原 中学生について感じる変化は、興味や関心が広がりにくくなっていることです。携帯ゲームの発売日には関心があっても、ゲーム機の内部構造や、ゲームソフトの作り方には関心が向かない。だから、授業中に身近な話題で生徒の好奇心を刺激することが難しくなっています。

杉山 最近は高校でも似たような状況を感じています。数学の授業で、生徒が別解の説明を嫌がるようになったのです。簡単に正解にたどりつく方法だけを教えてくれればいい、と。これは、限られた時間で素早く的確に解く力が問われるセンター試験の影響かもしれません。一つの大問をじっくり考えるような授業や、分からないことを楽しめるような授業をすることは、なかなか難しくなっています。

三浦 岡山県の高校入試では近年、論述問題がやや多く出されるようになりましたが、それは「高校ではこんな力を育てたい」という高校側の決意であり、中学校や中学生へのメッセージでもあります。また、資料を読み解き、自分の考えを表現するPISA型の問題も出されています。ドリル形式の勉強だけをしてきた生徒は戸惑うかもしれません。

藤原 公立高校の入試で何が問われているか、中学校でもきちんと分析しようとしています。私は、最近も定期考査などでも解答の過程を書く



岡山県岡山市立福南中学校

藤原昭雄

Fujiwara Akio

教職歴25年。同校に赴任して2年目。担当教科は数学。岡山市立御南中学校、岡山市立藤田中学校などを経て、現職。モットーは「誠実」。

問題を意識的に出しています。ただ、生徒はなかなか書けません。ノートも板書を写すだけで、教師の説明を聞いて新たに分かったことまでは書き加えられないのが現実です。だからといって、黒板に全てを書く

と、今度は書き写すのが追いつかない生徒が出てくる。考えながら書くことも勉強であることを生徒に分からせるのは簡単ではありません。
三浦 書くことが苦手な高校生は確かに増えました。自分の心の中は書いても、いろいろな意見や資料を参考に自分の意見をまとめ、表現することは難しい。だから、難関大の小論文対策はひと苦労です。

杉山 そう考えると、推薦・AO入試対策などで小論文の学習を経験した生徒は、それを契機に成長していく気がします。全員が時間を掛けて取り組めれば良いのですが、残念ながらそれは難しいのが現状です。
三浦 中高校生に限らず、今、若い世代は「コピー世代」と言われているように、自分の頭で考え、表現する方法を身に付けていないよう

に思います。そのため、自分の頭で考えることによる成功体験を十分に味わっていません。成功体験を積ませるために、例えば、企業で用いられるような発想法を活用しながら、考える楽しさを実感できる授業を行うことを検討してもよいかもしれません。本来、高校の学習では多面的なものの方を求めます。ならば、それをより意識した指導が、教師にも求められるのではないのでしょうか。教科書とチョークと話術で展開する一斉授業だけでは立ち行かなくなっていると、多くの教師は感じて



いるはずですが。

杉山 私たちは、最終的には別解も含めて、一つの問題にじっくり取り組む高校生を育てたいのです。しかし、今の高校生にいきなりそれを求めるのは難しく、そこに至るまでには訓練が必要です。生徒が一人ですべてをこなせるようになるためにはいろいろな方法を試したいと思います。私たち教師も今までの方法にこだわることなく自分の頭で考えることが求められているのでしよう。

いつどのように手を離しそれぞれの「自立」へと導くか

三浦 授業を変えるためには評価の方法も検討する必要があると思います。高校は定期考査などで何点取ったか、つまり知識・理解が評価の中心になりがちです。その点、中学校は観点別評価が徹底されていると感じます。

藤原 そうですね。中学校では関心・意欲・態度をしっかり評価しています。また、自分の努力で確実に改善できるものに意識的に取り組ませるため、例えば、提出物を出そうとする態度をきちんと身に付けさせ

ています。ただ、その分、教師の支援も手厚く、提出物を忘れないように一覧表にし、生徒だけでなく保護者にも配布しています。

杉山 最近は高校でも、提出物を一覽にして保護者に配布しています。その点では、進学校であつても中学校の指導に近付いていると思いきなり手を離すわけにはいかないからです。ただ、いつまでも手を掛ける過ぎると生徒は自立できません。いつ、どのように手を離すのかはとても難しい問題です。

三浦 中学校、高校、大学と連続する中で、それぞれの自立の形があるのでしよう。その中で高校生の自立とは、自分の目標を掲げ、それに合った学習を自分で進めることが出来るようになることだと思います。自立した生徒は短期間で驚くほど成績が伸びます。大切なのは、それぞれの学校段階での自立の形を追求することではないでしょうか。

杉山 今は、選り好みしなければ勉強しなくても大学に合格できる時代です。そういう意味では、自立すること自体が難しいといえます。しか

し、以前勤務した進路多様校では、卒業直後の生徒が主体的に高校に来て「このまま進学するのは不安だから」と自習に取り組んでいました。自分なりに将来を考え、目的意識を持って自主的に勉強を始めたことは、自立の形の一つといえるでしょう。何のために学ぶのかを中学校、高校、更にその先と、考える機会を継続して与えていくことも、接続の大切な視点の一つだと思います。

新課程は教え方を見直す良い機会

藤原 中高接続を考える上で、「教科指導」は外せない視点です。新課程はこれを超えるチャンスになると思います。中学校の新課程では教える内容が増えますが、授業時数も増えることで単元ごとの関連をしっかりと教えられるようになります。担当教科の数学では、高校への接続が楽になるのではないかと思います。ただ残念ながら、移行期のカリキュラムは、生徒の理解の流れに沿っていない部分もあります。高校の先生方には学び直しを含めた支援をお願いしたいところです。

三浦 移行期を中心にこれから数年間は、生徒が中学校の学習内容をどう学んできたかを十分に確認しないといけませんね。高校の教科書がこういう内容だから、それにつながる内容は理解しているはずだと思いつまないことが大切です。藤原先生がお話しされたように、中学校がどこで苦労しているか、高校側も勉強する視点は重要です。

杉山 どの部分の理解が不十分なのか、教師は生徒の様子から見取る必要があるでしょう。最近の生徒を見ていると、分からない箇所は読み飛ばして「なかったこと」にする傾向を感じます。分からないなりに考えたり調べたりすることが減っている、「分からない」という意識すら抜け落ちているようです。協同的な学習などを通して人に説明することで、自分の分からない部分に気付けるような場を作る必要があります。講義形式の授業にこだわらず、さまざまな手法が求められる。中学校の教育課程が大きく変わることは、高校教師にとっても教え方を見

直す良い機会となるはずですよ。

藤原 中学校では高校に比べて協同的な学習を積極的に取り入れていると思います。そんな中でも、新課程の移行期間で生徒の理解が難しいだろうと予想される單元については、より意図的にそういった手法を活用しています。生徒同士のやり取りを通じ、理解していると思っていた生徒が実はよく分かっていたと発見できることも多いのです。

授業を見合うことから 接続の在り方が見えてくる

編集部 教科指導における中高接続を促すためには、具体的に何から始めれば良いのでしょうか。

三浦 最も大切なのは中高それぞれ授業を見合うことでしょう。お互いの授業の様子を見るだけで、生徒の理解の過程など想像と違うことがある。いろいろな発見できるはずです。

藤原 私はチームティーチングで高校の教壇に立ったことがあります。それによって、中学校の授業が高校の学習にどうつながるのかを生徒に

きちんと言明できるようにしました。高校へのつながりを意識して授業を行うことは、特に成績上位層を中心に大きなメリットがあります。

杉山 中学校を訪れると、掲示物などから教室の雰囲気も全く違うことに気がきます。こういう雰囲気の中で学んだ生徒が1年生になったらこんな指導をしてみようなどと、具体的なアイデアが出てくるはずですよ。

三浦 どんな雰囲気の中で生徒が育ってきたかを知るとは、すなわち学習歴を知ることです。特に公立高校は地域に根ざした教育活動が求められます。生徒がどんな体験をしてきたのか、地域の文化の一つとしてももっと目を向けたいものです。

藤原 私たち中学校教師も、教科内容をはじめもっと高校のことを知るべきでしょう。お互いを知ることの違いもより鮮明になるはずです。何があっても生徒を受け入れることを原則とする中学校と、高校とではやはり生徒との距離は違います。違いを理解した上で、出来るだけスムーズに接続させる部分、段差として

しつかり際立たせる部分を見極めたいです。

三浦 学習指導に関して「高校だからこうあるべきだ」と押しつけるだけでは、多くの生徒はついてこれません。ですから、学習面での段差はなるべく無くする必要があります。一方で、高校進学を機に生活面をリセットしたいという生徒の気持ちを尊重するならば、中学校と高校は違うんだ、としつかり伝えるべき場面もあるはずですよ。高校によって生徒の状況はさまざまで、中高接続の形も千差万別のはずです。生徒の状況が、より良い接続の方法を考えていきたいですね。

次号予告 9月号は8月24日発行予定

つなげる 中学校と高校の指導

（後編）
新課程を踏まえ、中高をつなげる指導について、具体的な実践例を紹介する。